

部活動継続者にとっての中学校部活動の意義

——充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて——

お茶の水女子大学 角谷詩織¹・無藤隆

The significance of extracurricular activities in the life of junior high school students

Shiori Sumiya (Graduate School of Humanities and Science, Ochanomizu University, Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610) and Takashi Muto (Faculty of Human Life and Environmental Science, Ochanomizu University, Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610)

In this study, the significance of extracurricular activities in the life of junior high school students was examined. Seventh and eighth graders participated in a two-stage questionnaire survey, administered in May and October. Based on developmental stage-environment fit theory (Eccles, Wigfield, & Schiefele, 1998), how well extracurricular activity settings fit needs of the students was analyzed. In support of the theory's hypothesis, results indicated that whether an extracurricular activity satisfied the student's developmental needs affected his/her sense of fulfillment and satisfaction in school life. In addition, the effect of seventh graders' commitment to extracurricular activities on their satisfaction of school life was stronger in October than in May. The findings suggested that for students who felt uneasy in class for whatever reasons, extracurricular activities provided an opportunity for relief.

Key words: junior high school student, extracurricular activity, developmental stage-environment fit theory.

部活動は中学校移行にともなう大きな変化の一つである。小泉(1997)は、中学校移行にともなう不安と期待のなかに部活動が含まれることを示した。また、教育実践において中学生が学校生活に適応しているかどうかをみる視点の一つとして、“部活動に積極的に参加しているか”が含まれることは珍しくない(村山・山本, 1995)。たとえ意識していなくても部活動は教育実践にかかわる人々にとって意義あるものであることがうかがえる。

一方、わが国の中学校部活動に相当するものに、欧米での課外活動(extracurricular activities)があり、この意義について検討した研究は多い(e.g., Holland & Andre, 1987)。それらによると、(1)中学校の課外活動が生徒の人格的発達・学業達成に与える影響はポジティブだろう、(2)しかし、その影響は弱いだろう、(3)そして、社会的・知的能力背景により影響は異なるだろう(e.g., Mahoney & Cairns, 1997)ということが推測されている。

先行研究における課題も多く指摘されている。そのなかで、本研究が目し克服を試みる課題は四つある。それは、(1)研究結果が関連なのか因果関係なの

か明らかでない点(e.g., Marsh, 1992)、(2)研究の焦点が学業的適応にばかり注目されている点(e.g., Roeser & Eccles, 1998)、(3)部活動のカテゴリー化の基準が定まらない点、(4)活動への傾倒の強さの情報が不十分な点である(e.g., Holland & Andre, 1987)。

欧米での課外活動と我が国の部活動とは、その活動形態、種類などにおいて異なる点があり、単純に並列して考えることは適当ではないと思われるが、子どもの自己選択による所属(Mahoney & Cairns, 1997)などの点で共通の性質を有している。そこで、本研究では先行研究の課題の克服を試みつつ、部活動を継続している中学生にとっての部活動の意義を検討する。

第一の課題に対して、本研究では共分散構造分析を用いてより明らかな関係を見いだすことを試みる。

第二の課題に対して、青年期初期の発達課題を考慮すると、学業面ばかりでなくより広い意味での適応に焦点を当てる必要性が考えられる。本研究では充実感を中心とする生活感情(西平・久世, 1988)と学校生活への満足度に焦点を当てて検討する。

第三の課題に対して、実際に野球部とテニス部との比較などのように、部活動をそのまま物理的にカテゴリー化して統計的に処理することは不可能である。というのも、一つの中学校における一つの部の部員が30名を超える場合はまれで、分析結果の信頼性が下がるためである。さらに、運動部と文化部といったカ

¹ 本研究の分析にあたり、初歩から丁寧にご指導下さった豊田秀樹先生に心より感謝申し上げます。なお、本稿の分析結果、解釈に関する一切の責任は著者のものとします。

テゴリー化を行った研究 (e.g., Nicholson, 1979) もあるが、中学生の適応と部活動とのかかわりを検討するにあたり、運動部と文化部を比較することの意義は見だしにくい。そこで、本研究では部活動の物理的カテゴリー化から離れ、中学生自身が認識した部活動環境に焦点を当てて分析を行う。その際、集団の雰囲気や風土、凝集性を考慮することの意義はさまざまな領域で示されている (e.g., 伊藤・松井, 1996)。

第四の課題に対して、部活動への所属の有無による単純な比較 (Marsh, 1992) だけでは十分であるとはいえない。単なる参加日数が同じでも、部活動への傾倒の程度によってその意義は異なると思われる (狩野, 1994)。所属者における傾倒の程度の違いを考慮することにより、所属の有無による比較研究とは別の視点でその意義を検討する。

本研究のモデル作成にあたり、“発達段階-環境フィット理論” (e.g., Eccles, Wigfield, & Schiefele, 1998) を取り入れる。Eccles et al. (1998) は、環境の変化と生徒の動機づけとの関係を検討した。そして、中学生は自律欲求が高まるのに対し、学校では生徒の決定権や選択の機会が減少することなどが原因で個人の発達にともなう欲求と環境のミスマッチが生じ、生徒の動機づけが低下することを示した。この概念を部活動やクラスに取り入れ、中学生が部活動やクラスにおいて欲求を満たしているのかということが中学生の充実感や学校生活に影響を与えることが推測される。

そして、部活動の環境要因として集団凝集性と顧問教師の指導性に注目する。集団の雰囲気の形成は、その集団のキーパーソンの言動に左右されることが多い (狩野, 1994)。そして、中学校の部活動において大半のキーパーソンは顧問教師である。このことから、顧問教師の指導性は部活動の集団凝集性に影響を及ぼすと考えられる。なお、本研究では、個人が認識している主観的環境が適応に重要である (Roeser & Eccles, 1998) という概念を取り入れ、部活動環境として、中学生が認識した環境をとりあげる。また、ある集団に所属することで自己の要求の満足が可能であるという意識が高まり、集団に対する行動価が増大する (Cartwright & Zander, 1953 三隅訳編, 1959)。よって、部活動での欲求満足度が高まれば部活動へのコミットメントも高まると推測される。一方、クラスでも欲求が満たされている生徒は、学校生活全般における部活動の比重が低くなるため部活動へのコミットメントが低くなることが推測される。

以上から、主に以下の3点が仮説としてあげられる。(1) クラスだけでなく部活動においても欲求が満たされているほど充実感や学校生活への満足度が高まるだろう。(2) クラスでの欲求満足度が低い中学生は、部活動へのコミットメントが高まる場合に学校生活への満足度が高まるだろう。(3) 中学生が認識した顧問

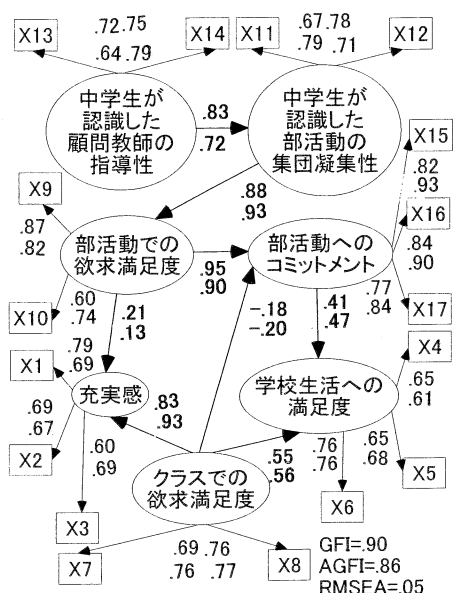


Figure 1. 仮説モデルと5月の分析結果。上段：1年生，下段2年生。

教師の指導性が高まると、中学生が認識した部活動の集団凝集性も高まり、そのことによって部活動での欲求満足度が高まるだろう。

これらを本研究の大きな仮説とし、Figure 1に因果モデルとして想定する。これらの仮説を検証しながら、部活動と部活動を継続している中学生の適応感との因果関係を探索することを目的とする。なお、Figure 1には後の分析結果を数値として記している。

方法

対象 関東地方の公立X, Y中学校の1, 2年生1003名を調査対象とした。両校とも部活動は盛んだと自負しており、賞状やトロフィーなどが昇降口や校長室前に飾られ、新入生に対する部活動紹介の日も設けられている。一方、特に運動部では社会体育への移行も検討されはじめている。本研究では一つの部活動に継続して所属している中学生785名(1年生433名, 2年生352名)を分析対象とした。

調査手続き 予備調査として中学校の部活動観察、教師と中学生へのインタビューを行い、本調査として質問紙を実施した。第1回調査を1998年5月-6月、第2回調査を1998年10月-11月に行った。質問紙、実施方法の説明を学校に郵送し、担任教師による学級ごとの実施を、無理な場合は持ち帰りによる実施を要請した。回収率は、第1回調査が89.0% (893名)、第2回調査が86.8% (871名)であった。

調査内容 予備調査も考慮し、大野 (1984)、深谷・田中・深谷 (1997)、樋口 (1996)、吉村 (1997)、桂・中込 (1990) をもとに中学生に適切な表現に修正

Table 1
構成概念に対応する観測変数

| 構成概念 | 観測変数 (項目数) | α | |
|-------------------|---------------------------|----------|------|
| | | 5 月 | 10 月 |
| 充実感 | X1 生活充実感 (4) | .78 | .84 |
| | X2 自己承認感 (3) | .73 | .77 |
| | X3 他者からの承認感 (2) | .68 | .67 |
| 学校生活への満足度 | X4 友だちに対して満足している | | |
| | X5 部活動に対して満足している | .73 | .78 |
| | X6 全体的に満足している | | |
| クラスでの欲求満足度 | X7 クラスでの所属欲求満足度 (5) | .86 | .93 |
| | X8 クラスでの自律欲求満足度 (5) | .86 | .87 |
| 部活動での欲求満足度 | X9 部活での所属欲求満足度 (5) | .88 | .94 |
| | X10 部活での自律欲求満足度 (5) | .85 | .90 |
| 中学生が認識した部活動の集団凝集性 | X11 部員主体性 (4) | .81 | .90 |
| | X12 目標志向性 (4) | .75 | .84 |
| 中学生が認識した顧問教師の指導性 | X13 技術指導性 (6) | .92 | .93 |
| | X14 集団維持性 (3) | .83 | .88 |
| 部活動へのコミットメント | X15 部活動があるから学校が楽しい | | |
| | X16 部活動は学校生活の中で居場所を与えてくれる | .89 | .92 |
| | X17 部活動は自分の生活になくてはならないものだ | | |

したものを用いた。質問項目の詳細は Table 1 と付表に記す。なお、回答形式は 5. “とてもそう思う” — 1. “全くそう思わない” の 5 件法によるものとした。

構成概念 仮説となる因果モデルの観測変数設定のため、主因子解、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、学校による大きな違いはみられず、クラス、部活動での欲求満足度は各 2 因子（所属欲求満足度、自律欲求満足度）、充実感は 3 因子（生活充実感、自己承認感、他者からの承認感）、学校生活への満足度は 1 因子、中学生が認識した部活動の集団凝集タイプは 2 因子（部員主体性、目標志向性）、中学生が認識した顧問教師の指導性は 2 因子（技術指導性、集団維持性）、部活動へのコミットメントは 1 因子が得られた。各因子の構成項目において因子負荷量が .35 より高いものの項目得点を単純平均して合成得点を構成した。なお、各下位尺度の信頼性係数 α は .67— .94 の値をとり、項目数を考慮すると、内的整合性に問題はないと解釈する。仮説に対応する構成概念と観測変数を Table 1 に示す。因子分析によって因子が複数抽出された場合は合成変数を、1 因子のみ抽出された場合は項目変数を観測変数として用いた。

なお、統計ソフトには SPSS for Windows リリース 8.1J, AMOS を用いた。

結 果

第 1 回調査（5 月）の分析結果を以下に示す。モデルの分析における適合度指標（Goodness of Fit Index: 以下 GFI と略す）の値は .90、修正適合度指標（Adjusted Goodness of Fit Index: 以下 AGFI と略す）の値は .86、Root Mean Square Error of Approximation（以下 RMSEA と略す）の値は .05 で、構成されたモデルは標本共分散行列をよく説明していると判断される。

Figure 1 は、検討した因果関係を共分散構造モデルによって分析した結果である。解釈を容易にするために、単方向の矢印には標準化された因果関係を、双方向の矢印には相関係数を付した。係数はすべて帰無仮説ゼロのもとで、統計的に有意なものである ($p < .05$)。想定した構成概念によって説明できない顕在変数の分散を生じさせる誤差の項、原因となる構成概念によって説明できない結果となる構成概念の分散を生じさせる誤差の項（豊田, 1998）は省略した。また、Table 2 に構成概念間の相関行列を示す。なお、数値について、上段に 1 年生の値を、下段に 2 年生の値を記した。以下に 1 年生の分析結果を示す。

第一に、“学校生活への満足度” に対する規定要因に関して、“部活動へのコミットメント” から“学校

Table 2
5月の構成概念間相関^{a)}

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ |
|--------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|
| ①充実感 | | | | | | | |
| ②学校生活への満足度 | .67 | | | | | | |
| ③クラスでの欲求満足度 | .92 | .67 | | | | | |
| ④部活動での欲求満足度 | .59 | .62 | .47 | | | | |
| ⑤中学生が認識した部活動の集団凝集性 | .62 | .60 | .54 | .88 | | | |
| ⑥中学生が認識した顧問教師の指導性 | .68 | .60 | .65 | .73 | .83 | | |
| ⑦部活動へのコミットメント | .41 | .56 | .27 | .82 | .74 | .58 | |

a) 上段：1年生，下段：2年生。

生活への満足度”へのパス係数は.41，“クラスでの欲求満足度”から“学校生活への満足度”へのパス係数は.55，“部活動へのコミットメント”と“クラスでの欲求満足度”間の相関係数は.27である。よって，“部活動へのコミットメント”や“クラスでの欲求満足度”が高いと“学校生活への満足度”も高まることが示された。また，“部活動での欲求満足度”から“学校生活への満足度”へ直接パスを引くことができなかった。

第二に，“部活動へのコミットメント”の規定要因に関して，“部活動での欲求満足度”から“部活動へのコミットメント”へのパス係数は.95，“クラスでの欲求満足度”から“部活動へのコミットメント”へのパス係数は-.18，“部活動での欲求満足度”と“クラスでの欲求満足度”間の相関係数は.47である。よって，“クラスでの欲求満足度”が一定ならば“部活動での欲求満足度”が高いほど，“部活動へのコミットメント”が高まる一方で，“部活動での欲求満足度”が一定ならば“クラスでの欲求満足度”が高いと“部活動へのコミットメント”が低くなる傾向が弱いながらもみられることが示された。

第三に，“充実感”の規定要因に関して，“部活動での欲求満足度”から“充実感”へのパス係数は.21，“クラスでの欲求満足度”から“充実感”へのパス係数は.83であり，“部活動での欲求満足度”と“クラスでの欲求満足度”間の相関係数は.47である。よって，“部活動での欲求満足度”や“クラスでの欲求満足度”が高いと“充実感”が高まることが示された

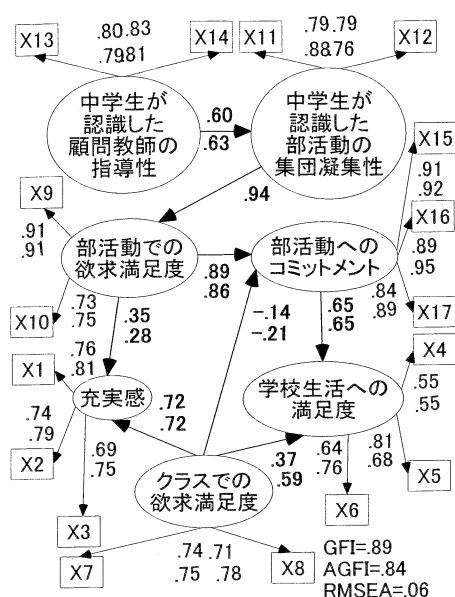


Figure 2. 10月の分析結果。上段：1年生，下段：2年生。

が，“充実感”への規定要因として“部活動での欲求満足度”は信頼区間が.06—.36であるのに対し，“クラスでの欲求満足度”はそれが.67—.99であり，有意に高いことが示された。また，“充実感”に対して“部活動における欲求満足度”は“部活動へのコミットメント”を介さずに，直接規定することが示された。

第四に，“中学生が認識した部活動の集団凝集性”から“部活動での欲求満足度”へのパス係数は.88であり，強い規定要因となった。一方，“中学生が認識した顧問教師の指導性”から“部活動での欲求満足度”に直接パスを引くことができなかった。

第五に，“中学生が認識した顧問教師の指導性”から“中学生が認識した部活動の集団凝集性”へのパス係数は.83であり，強い規定要因となることが示された。

なお，構成概念から各顕在変数への影響指標は，いずれも.60以上となっているので，構成概念と顕在変数は適切に対応しているといえよう。

つぎに，第2回調査（10月）の分析結果を示す。モデルの分析におけるGFIの値は.89，AGFIの値は.84，RMSEAの値は.06で，いずれも十分高い値ではないが，観測変数の数を考慮した場合（豊田，1998），モデルとデータの適合度は比較的高く，構成されたモデルは標本共分散行列を説明していると判断される。

Figure 2は，検討した因果関係を共分散構造モデルによって分析した結果である。矢印，記号，数値の解釈は前述のものと同様である。係数はすべて帰無仮説ゼロのもとで，統計的に有意なものである。また，

Table 3
10月の構成概念間相関^{a)}

| | ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ |
|--------------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|---|
| ①充実感 | | | | | | | |
| ②学校生活への満足度 | .51 | | | | | | |
| ③クラスでの欲求満足度 | .80 | .40 | | | | | |
| ④部活動での欲求満足度 | .51 | .63 | .22 | | | | |
| ⑤中学生が認識した部活動の集団凝集性 | .50 | .60 | .23 | .94 | | | |
| ⑥中学生が認識した顧問教師の指導性 | .48 | .43 | .39 | .56 | .60 | | |
| ⑦部活動へのコミットメント | .34 | .67 | .05 | .85 | .80 | .45 | |

^{a)} 上段：1年生，下段：2年生。

Table 3に構成概念間の相関行列を示す。以下に1年生の分析結果を示す。

第一に，“部活動へのコミットメント”から“学校生活への満足度”へのパス係数は.65（信頼区間.60—.71），“クラスでの欲求満足度”から“学校生活への満足度”へのパス係数は.37（信頼区間.26—.48）であり，“部活動へのコミットメント”の規定力のほうが有意に高い。“部活動へのコミットメント”と“クラスでの欲求満足度”間の相関係数は.05である。また，“部活動での欲求満足度”から“学校生活への満足度”へ直接パスを引くことができなかった。

第二に，“部活動での欲求満足度”から“部活動へのコミットメント”へのパス係数は.89，“クラスでの欲求満足度”から“部活動へのコミットメント”へのパス係数は-.14，“部活動での欲求満足度”と“クラスでの欲求満足度”間の相関係数は.22であった。

第三に，“部活動での欲求満足度”から“充実感”へのパス係数は.35（信頼区間.25—.45），“クラスでの欲求満足度”から“充実感”へのパス係数は.72（信頼区間.56—.89）であり，“クラスでの欲求満足度”のほうが規定力が有意に高い。“部活動での欲求満足度”と“クラスでの欲求満足度”間の相関係数は.22であった。

第四に，“部活動での欲求満足度”に対して，“中学生が認識した部活動の集団凝集性”からのパス係数は.94で強い規定要因となるが，“中学生が認識した顧問教師の指導性”から直接パスを引くことができなかった。

第五に，“中学生が認識した顧問教師の指導性”から“中学生が認識した部活動の集団凝集性”へのパス係数は.60であり，強い規定要因となっている。

なお，構成概念から各顕在変数への影響指標は，いずれも.55以上となっているので，構成概念と顕在変数は適切に対応しているといえよう。

5月，10月ともに，第一，二，三の結果から，クラスだけでなく部活動においても欲求が満たされているほど充実感や学校生活への満足度が高まること，クラスでの欲求満足度が低い中学生は，部活動へのコミットメントが高まる場合に学校生活への満足度が高まること示され，仮説(1)，(2)が支持された。また，第四，五の結果から，中学生が認識した顧問教師の指導性が高まると，中学生が認識した部活動の集団凝集性も高まり，そのことによって部活動での欲求満足度が高まること示され，仮説(3)が支持された。

5月と10月とで比較を行うと，“部活動へのコミットメント”から“学校生活への満足度”へのパス係数が，5月は.41（信頼区間.34—.48）であるのに対し，10月は.65（信頼区間.60—.71）であり，10月のほうが有意に高い。また，“学校生活への満足度”に対する“部活動へのコミットメント”と“クラスでの欲求満足度”という二つの規定要因間に5月では有意差がみられなかったが，10月では有意差がみられ，“部活動へのコミットメント”の規定力が相対的に高いことが示された。

“中学生が認識した顧問教師の指導性”から“中学生が認識した部活動の集団凝集性”へのパス係数が，5月は.83（信頼区間.72—.94）であるのに対し，10月は.60（信頼区間.49—.71）であり，10月のほうが有意に低かった。

2年生5月，10月で同様の分析を行った結果，仮説は支持され，仮説となるモデル（Figure 1）は安定したモデルであることが示された。しかし，5月と10月を比較したとき，1年生と同様のパス係数の有意差はみられなかった。

なお，“部活動での欲求満足度”と“部活動へのコミットメント”間の相関，“中学生が認識した顧問教師の指導性”と“中学生が認識した部活動の集団凝集性”間の相関が高く，多重共線性の可能性が考えられるが，1,2年生5月，10月の4群において同様の結果が得られたことから，安定した結果であると判断される。

考 察

以上の結果から，クラスだけでなく部活動場面においても，その場面に対して満足していることではなく，その場面のなかで中学生の発達課題にかかわる欲求（本研究では所属欲求と自律欲求）が満たされていることが中学生の充実感や学校生活への満足度に対し

て重要であることが推測される。これは、クラスだけでなく、部活動においても Eccles et al. の発達段階環境フィット理論を裏付けていると考えられる。個人のアイデンティティが形成されるのは、あらゆる所属集団においてではなく準拠集団においてのみである（狩野, 1994）ことから、部活動は中学生にとって重要な所属集団となりうるだろう。また、クラスでの欲求満足度が低い中学生が部活動へのコミットを高める傾向にあり、そのことによって学校生活への満足度が高まることから、学校生活への満足度を問題とする場合、クラスで欲求が満たされていない一部の中学生にとって部活動がそれを補う場になりうるということが推測される。これらのことは、Hirsch & Rapkin (1987) が指摘した学級集団の補足集団となる集団の必要性を裏付けるとともに、中学生の適応感には学業や学級集団だけがかかわっているのではないことを示し、Roeser & Eccles (1998) の指摘のように、学業的適応のみではなく広い視野での適応研究の必要性を裏付けるものと考えられる。

本研究において、クラスでの欲求満足度と比較すると、部活動での欲求満足度が中学生の充実感に及ぼす影響力は小さいことが示された。この点は、“部活動の意義はポジティブであるが小さい”という見解 (e.g., Mahoney & Cairns, 1997) と一貫している。一方、“部活動での欲求満足度”は“部活動へのコミットメント”を介して“学校生活への満足度”を強く規定しており、特に1年生10月において、それは“クラスでの欲求満足度”の規定力よりも有意に強くなることが示された。このことは、教育実践の場で部活動が生徒の適応と大きく結びつけられていることと一貫する結果であると考えられる。この、一見矛盾しそうな結果は、教育実践において部活動の意義の大きさが認識されているにもかかわらず、それを先行研究において見いだすことができなかった要因の一つに、部活動へのコミットメントを考慮しなかった点があることが推測される。部活動は、中学生にとって学校生活と非常に強く結びついている。日々中学生と接している教師はその結びつきを実感しているだろう。一方、中学生の充実感という、より広い適応感に対する部活動の影響力が、先行研究と同様に小さいものとなったことは、やはり学業が大きな課題となる中学生にとって、“学校は楽しいが、自分に自信がもてない”という感情を反映しているとも思われる。今後、中学生の学校生活への満足度と充実感との関係を検討する必要があるだろう。

1年生において、“中学生が認識した顧問教師の指導性”が“中学生が認識した部活動の集団凝集性”に及ぼす規定力は5月のほうが10月よりも高いことが示された。5月から10月の間に、大半の部活動では3年生の引退という大きな変化が起こる。大半の1年生

にとって、5月の部活動は新鮮で楽しいものである反面、部活動への所属と学校生活との結びつきがまだそれほど強いものではないことが推測される。しかし、夏休みを経て大きな大会も経験し、3年生が引退したとき、部活動は1年生の学校生活において大きな比重を占めるものとなる。“部活動での欲求満足度”と“クラスでの欲求満足度”間の相関が5月よりも10月のほうが小さいことから、継続者にとって部活動は次第に学校生活のなかでの活動の一つとして強く認識され始め、部活動において欲求が満たされているか否かが学校生活への満足度を強く規定するようになると思われる。

また、5月は1年生の入部にあたり、先生も上級生も一緒になって新しい部を築き上げはじめる。集団そのものも時期とともに発達するため、教育実践ではそれに応じた教師の指導性が求められる（蘭・古城, 1996）。ある集団の初期の段階は、教師先導型の風土が生じることから、5月の部活動では、実際に教師と部の集団凝集性が強く結びついたものとなっていることが考えられる。さらに、中学生は、次第に自律欲求が高まる時期でもある (e.g., Eccles et al., 1998)。1年生は、初期は部活動の傍観者的存在であり、教師と部の集団凝集性とを強く結びつけていたのに対し、次第に部の集団凝集性と教師の指導性とを切り離して認識し、逆に自分と結びついたものとして認識するようになるのではないだろうか。これらの現象によって、本研究において1年生にのみ“中学生が認識した部活動顧問の指導性”から“中学生が認識した部活動の集団凝集性”への規定力が5月のほうが10月よりも高いという結果が得られたのではないかと考えられる。

なお、本研究では、多重共線性の可能性が考えられる結果が得られたが、項目内容から、また、1, 2年生ともに5月10月において同様の結果が得られたことから、本結果は安定したものであると判断した。しかし、本研究における構成概念が、中学1, 2年生では十分分化していないのではないということも推測できるため、今後さらなる検討が望まれる。なお、本研究では部活動継続者のみに焦点を当てたが、今後適切な方法を用いて部活動非所属者も含めた検討を行う必要があるだろう。

結 論

部活動継続者にとって、クラスだけでなく、部活動においても中学生の欲求が満たされていれば、充実感や学校生活への満足度が高まる可能性がある。特に、クラスでの欲求満足度の低い中学生にとって、部活動は学校生活への満足度を高めてくれる要因となりうることを示唆された。そして、中学生に対する部活動の影響力は、1年生の5月から10月にかけて増加し、変容すると考えられる。

引用文献

- 蘭 千壽・古城和敬 1996 教師と教育集団の心理
誠信書房
(Araragi, C., & Kojo, K.)
- カートライト D.・サンダー A. 三隅二不二 (訳編)
1959 グループダイナミックス 誠信書房
(Cartwright, D., & Zander, A. 1953 *Group dynamics*. Row, Peterson & Co.)
- Eccles, J. S., Wigfield, A., & Schiefele, U. 1998
Motivation to succeed. In W. Damon & N. Eisenberg
(Eds.), *Handbook of child psychology*. Vol. 3.
Social, emotional, and personality development. New
York: John Wiley & Sons.
- 樋口康彦 1996 スポーツ集団における組織要因とメン
バーの達成動機との関連について 実験社会心理
学研究, **36**, 42-55.
(Higuchi, Y. 1996 The relationship between or-
ganizational elements and achievement motivation in
sport team. *Japanese Journal of Experimental
Social Psychology*, **36**, 42-55.)
- Hirsch, B. J., & Rapkin, B. D. 1987 The transition to
junior high school: A longitudinal study of self-
esteem, psychological symptomatology, school life,
and social support. *Child Development*, **58**, 1235-
1243.
- Holland, A., & Andre, T. 1987 Participation in
extracurricular activities in secondary school: What
is known, what need to be known? *Review of
Educational Research*, **57**, 437-466.
- 深谷昌志・田中統治・深谷野亜 1997 学校内の人間
関係 モノグラフ中学生の世界, **57**, ベネッセ教育研
究所
(Fukaya, M., Tanaka, T., & Fukaya, N.)
- 伊藤亜矢子・松井 仁 1996 学級風土研究の経緯と
方法 北海道大学教育学部紀要, **72**, 47-72.
(Ito, A., & Matsui, H. 1996 A note of classroom
climate research, with special reference to Classroom
Environment Scale (CES) and Learning Environ-
ment Inventory (LEI). *Bulletin of the Faculty of
Education Hokkaido University*, **72**, 47-72.)
- 狩野素朗 1994 集団成員性の階層構造と凝集力 九
州大学教育学部紀要 教育心理学部門, **39**, 1-6.
(Kano, S. 1994 A hierarchical structure of group
membership and the cohesiveness. *Research Bulletin
(Educational Psychology Section) The Faculty of
Education, Kyushu University, Japan*, **39**, 1-6.)
- 桂 和仁・中込四郎 1990 運動部活動における適応
感を規定する要因 体育学研究, **35**, 173-185.
(Katsura, K., Nakagomi, S. 1990 The determinant
factors of the adjustment to school athletic clubs.
Japan Journal of Physical Education, **35**, 173-185.)
- 小泉令三 1997 小・中学校での環境移行事態におけ
る児童・生徒の適応過程——中学校入学・転校を中
心として—— 風間書房
(Koizumi, R.)
- Mahoney, J. L., & Cairns, R. B. 1997 Do extracurric-
ular activities protect against early school dropout?
Development Psychology, **33**, 241-253.
- Marsh, H. W. 1992 Extracurricular activities:
Beneficial extension of the traditional curriculum or
subversion of academic goals? *Journal of Educa-
tional Psychology*, **84**, 553-562.
- 村山正治・山本和郎 (編) 1995 スクールカウンセ
ラーその理論と展望 ミネルヴァ書房
(Murayama, M., & Yamamoto, K.)
- Nicholson, C. S. 1979 Some attitudes associated
with sport participation among junior high school
females. *Research Quarterly*, **50**, 661-667.
- 西平直喜・久世敏夫 (編) 1988 青年心理学ハンド
ブック 福村出版
(Nishihira, N., & Kuze, T.)
- 大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究
——現代日本青年の心情モデルについての検討——
教育心理学研究, **32**, 100-109.
(Ohno, H. 1984 The fulfillment sentiment in con-
temporary adolescence: An examination of the senti-
ment model for contemporary Japanese adolescence.
Japanese Journal of Educational Psychology, **32**,
100-109.)
- Roesser, R. M., & Eccles, J. S. 1998 Adolescents'
perception of middle school: Relation to longitudi-
nal changes in academic and psychological adjust-
ment. *Journal of Research on Adolescence*, **8**, 123-
158.
- 豊田秀樹 1998 共分散構造分析 [事例編]——構造
方程式モデリング—— 北大路書房
(Toyoda, H.)
- 吉村 斉 1997 学校適応における部活動とその人間
関係のあり方——自己表現・主張の重要性—— 教
育心理学研究, **45**, 337-345.
(Yoshimura, H. 1997 Human interactions in
extracurricular athletic clubs in relation to school
adjustment members: The importance of self-
assertion. *Japanese Journal of Educational Psy-
chology*, **45**, 337-345.)

——1999. 9. 8 受稿, 2000. 9. 2 受理——

付 表

- 部活動 (クラス) での欲求満足度 (各 10 項目)
1. 自分で選んだり決めたりできている
 2. 活動内容に自分の意見が生かされている
 3. 果たすべき役割がある
 4. 自分の判断に自信を持って行動できている
 5. 自分らしさを発揮している
 6. 部 (クラス) の一員であることで安心することがある
 7. 部 (クラス) の一員であることを誇りに思うことがある

8. 自分にとって大切な集団であると思う
9. 自分に強い影響を与えている集団だと思う
10. 自分にとって大切な居場所だと思う

充実感（9項目）

1. 毎日の生活の中に熱中できることがあると感じる
2. 毎日の生活の中で何かを成し遂げる喜びを感じている
3. 生活に充実感に満ちた楽しさがある
4. 自分の夢をかなえようと意欲にもえている
5. 自分の良い面を一生懸命のばそうとしている
6. 自分の良いところも悪いところもありのままだに認めることができる
7. 自分なりの個性を大切にしている
8. 先生から認められていると感じる場がある
9. 仲間から認められていると感じる場がある

中学生が認識した部活動の集団凝集性（8項目）

1. 部の仲間の中には、お互いにうまくなろうとする雰囲気がある
2. 試合に勝つことやコンクールへ入賞することなど成績を残すことを大きな目標としている
3. みんなの共通の目標に向かってメンバーが一丸とな

って活動している

4. 一人一人が目標をもってそれに向かって活動している
5. 意見を率直に言える雰囲気がある
6. 何でも自由に話し合える雰囲気がある
7. 部員一人一人の意思を大切にしている
8. 自分たちが主体となって活動している

中学生が認識した顧問教師の指導性（9項目）

1. 部活動のある日は指導をしに来てくれる
2. 練習内容や計画を部員が十分に理解できるように教える
3. 部員の技術向上のために面倒をよく見る
4. 反省したことは次の機会に生かすように指導する
5. 技術やコツを上手に部員に教える
6. 練習の時は先生自身が模範演技者となって指導する
7. 失敗したときなど冗談を言ったりしてみんなを励ます
8. 部員全体がなじめるような雰囲気を作る努力をしている
9. 部員の立場をよく考えている